



[令和 4 年 6 月 8 日 定例会発表要旨]

富丘の「妙行寺」の誕生について

手稲郷土史研究会 会員 中島千恵子

手稲区富丘 2 条 5 丁目にある日蓮宗の寺院『妙行寺』誕生のいきさつと私の家族の関わりについて、お話ししたいと思います。

私の祖母は 村岡キセ といい、明治 16 (1883) 年 8 月に生まれました。手稲で一番初めにできた工場「乙黒製油所」の乙黒定七さん (二代目) の妻で 三代目 定七さんの母親である キクセさんとは 3 歳違いの姉妹になります。キセは次女、キクセさんは三女でした。二人の父親 (私の曾祖父) 東山源八郎は、明治の初期に宮城県から手稲村 (上手稲=いまの西区西町~西野付近か?) へ入植しました。このとき、「仏像」を背負って来たと聞いています。現在の『日登寺』(西区山の手 2 条 1 丁目) の仏様です。源八郎はその後、琴似村の鈴木セイと結婚しますが、子は女 5 人で男子はなく、養子を迎えて東山の家を継がせました。キセが 13 歳の時に母親のセイは死去、父親の源八郎も 29 歳の時に死去し、若い頃は厳しい人生を過ごしたようです。キセもキクセさんも結婚はしましたが、時代を考えると、さぞかし苦労は多かったでしょう。実際、キセは二度の結婚も、夫に先立たれています。村岡の姓は、末子で唯一の男子だった私の父 匡人^{まさひと}が継ぎました。曾祖父の源八郎も東山家の養子だったので、明治から昭和の中頃までは、家 (姓) をどう守っていくかが、何より重んじられていたのだと思います。

村岡キセは 男勝りで気丈夫で、家族を守りながら農地を開墾し、養鶏や養蚕なども行いました。もともと商人の娘で、経理もできた 才ある人でしたが、苦労の人です。ある時、留守の間に自宅が火災で全焼し、妹のキクセさんのいる富丘 (当時は軽川) へと、匡人と身一つで出てきたといひます。やがて匡人は 乙黒製油所で働くようになりますが、戦後の復員が遅かったため、祖母は一人で頑張っていたのでしょう。私が生まれ育ったのは、製油所の正門前にある社宅でした。子供の頃は乙黒家の三代目 定七さんの時代で、私は工場の菜種を搾る香りが好きでした。母も製油所の広い敷地で、ウメの実を採ったり 荷車を引く馬の飼料にするための草を刈ったりなどの手伝いをしてい



上: 新築なった村岡家住宅
下: 土地の一部を妙行寺に寄進
(昭和 30 年代撮影 現在の富丘 2 条 5 丁目)

たので、その様子を遊びながら見ていたことも 懐かしい思い出です。私が小学生の頃に 自宅は移りましたが、三交代制で働く父の弁当を届けるために、工場へはときどき行っていました。

キセもキクセさんも 信仰心が厚く、お寺参りに行く姿をよく見ました。豊平の『経王寺』^{けいおうじ} や琴似の『日登寺』には、私も同行したものです。キセは、昭和 48 (1973) 年 7 月に亡くなりますが、その祖母の願いをかなえようと、父はお寺に土地を寄進することを決めます。現在、『妙行寺』が建つ場所です。

『妙行寺』の沿革をひもとくと 開基は昭和 12 (1937) 年、伊保内義顕上人によって「軽川布教所」が設けられました。いまの手稲中央小学校の近くです。昭和 52 (1977) 年、現住職の神光靖上人が 富丘に布教所を移転。境内地の寄進者は 村岡匡人でした。身延山の日蓮宗総本山より許可が下り、『妙行寺』として新寺が設立されました。





現在の妙行寺

創立5周年の昭和57(1982)年には、鉄筋コンクリート3階の本堂、納骨堂、庫裡などを建てます。なお、この年、乙黒家のキクセさんが97歳で逝去。私の父 村岡匡人も60歳で亡くなり、『妙行寺』で葬儀が執り行われました。昭和62(1987)年、創立10周年と伊保内上人の開基50周年を記念し増築。駐車場の上に庫裡が完成。平成2(1990)年、伊保内上人還化。平成9(1997)年、創立20周年を記念し新本堂を建設。平成11

(1999)年、「日蓮聖人像萬霊之供養塔」建立。令和元(2019)年、村岡キミ(匡人の妻で私の母)が99歳で死去、『妙行寺』で葬儀を行いました。現在、寺院には3名の僧侶がいらっしゃいます。

横浜での生活が長かった私ですが、平成26(2014)年に札幌へ戻った後は、主人を納骨させていただいた縁もあって、毎月、『妙行寺』へお参りに行っています。まわりの景色は、私が住んでいた頃とすっかり変わってしまいました。それでも 富丘の地に来ると“ふるさと”を感じます。



★ 手稲の歴史パネルがウェブ上で閲覧できます 手稲郷土史研究会が手稲区地域振興課との協働で作成している「手稲歴史資料展示コーナー」のパネルのうち、「『手稲開村』のきっかけとなった片倉小十郎家臣団の入植」・「手稲最大の産業遺産 金が採れたヤマ『手稲鉱山』」・「前田の地名のおこり 酪農の礎を築いた『前田農場』」の三つのテーマの資料が、同課のご厚意により手稲区のホームページ上で閲覧(PDFダウンロード)できるようになりました。印刷も可能です。パソコンやスマホから「歴史／札幌市手稲区」と検索してください。皆さんの研究の一助になれば幸いです。

★ NHKの番組「にっぽん百低山」に協力しました 酒場詩人の吉田類氏が全国の1,500m以下の低山を訪ねてその魅力を紹介するNHKの番組『にっぽん百低山』で「手稲山」が取り上げられることになり、手稲郷土史研究会の林俊一事務局長が出演に協力。このたび収録を終えました。新聞のテレビ番組欄やNHKのホームページで放送日をお確かめになり、どうぞお見逃しのないよう…。

ぶれいくたいむ

オオウバユリをたずねて…

淡いクリーム色のラッパ状の花を 高い茎に縦列して咲かせるオオウバユリ — 薄暗い林の中でひっそりと、ときに群落をなして自生するその姿に惹かれ、毎年7月中旬になると、私は手稲の山すそなどへ 開花を確かめに出掛けています。

アイヌ語で「トゥレブ」(溶け・させる・もの)と呼ばれるオオウバユリはコタンの人びとにとって 重要な食糧のひとつでした。鱗茎からとるデンプンは、冷害に苦しむ 開拓草創期の和人の命も支えたと伝わります。

オオウバユリはやや湿った土地を好むことから、手稲=テイネ・イの“昔の植生”を示すものともいえるでしょう。大正末期の地図に名前が載る 手稲本町のメムのある旧家の庭でも、数年前まで、たくさんの花が見られました。それも 新たな施設の建設に伴って姿を消し、いまや 街なかの住宅地でオオウバユリを探し出すことは、すっかり難しくなっていました。[J]



オオウバユリ

次回定例会 ⇒ 発表内容「地域基幹病院の役割～手稲溪仁会病院」／ 齋藤太嘉男氏(手稲溪仁会病院 事務次長)／ 8月10日(水) 18:15～／手稲区民センター 3階 視聴覚室 ※マスク着用・手指消毒のうえご参加ください。